英米文学史講座 7

十九世紀 I

イギリス文学(1798–1835)概観 . . . . . 加納秀夫
イギリスの詩歌 . . . . . 小川二郎
イギリスの小説 . . . . . 近藤いね子
イギリスの批評 . . . . . 佐藤清
イギリスの散文(随筆) . . . . . 橋泰来
ワーズワス . . . . . 前川俊一
スコット . . . . . 大和資雄
コールリッジ . . . . . 桂田利吉
チャールズ・ラム . . . . . 福原麟太郎
バイロン . . . . . 宮崎孝一
シェリー . . . . . 森清
キーツ . . . . . 菊池亘
イギリスの絵画 . . . . . 岡本謙次郎
イギリスの時代背景 . . . . . 八木毅
アメリカ文学(1798–1835)概観 . . . . . 杉木喬
アーヴィング . . . . . 西川正身
フェニモア・クーパー . . . . . 原田敬一

英米文学史講座

KENKYUSHA

英米文学史講座　第七巻

十　九　世　紀　I

昭和三十五年十一月五日　印　刷　　昭和三十五年十一月十五日　初版発行
昭和三十九年四月十五日　再版発行

監修者　福　原　麟　太　郎
　　西　川　正　身

発行者　小　酒　井　益　蔵　東京都千代田区富士見町２の１

印刷所　研究社印刷株式会社　東京都新宿区神楽坂１の２

発行所　研究社出版株式会社　東京都千代田区富士見町2の1
振替口座東京83761番

定価 480 円

目　次

イギリス文学(1798-1835)概観 . . . . . 加納秀夫 1
イギリスの詩歌 . . . . . 小川二郎 28
イギリスの小説 . . . . . 近藤いね子 44
イギリスの批評 . . . . . 佐藤　清 61
イギリスの散文(随筆) . . . . . 橋　泰来 80
ワーズワス . . . . . 前川俊一 96
スコット . . . . . 大和資雄 114
コールリッジ . . . . . 桂田利吉 136
チャールズ・ラム . . . . . 福原麟太郎 152
バイロン . . . . . 宮崎孝一 168
シェリー . . . . . 森　清 179
キーツ . . . . . 菊池　亘 195
イギリスの絵画 . . . . . 岡本謙次郎 212
イギリスの時代背景 . . . . . 八木　毅 224
アメリカ文学(1798-1835)概観 . . . . . 杉木　喬 239
アーヴィング . . . . . 西川正身 261
フェニモア・クーパー . . . . . 原田敬一 272

英米文学年表(1798-1835) 283
索　引 293

イギリス文学 (1798–1835) 概観

加納秀夫

時間的にいえば、わずか半世紀にもたりない期間である。それを文学史的にみて、一つの時代としなければならないとするなら、そんな例はイギリス文学史のどの時代にもないのであるから、まずなによりもこの点が問題になる、そう考えてよいだろう。

i. 政治と文学

いま、この時代が短いということをいいかえて、これにいわゆる「過渡期」(the age of transition) という名称をあたえることもできよう。しかし、その場合にも、この時代の文学が過渡的だというのではない。そういった名称が問題になるのは、むしろ、全般的な社会生活が一つの転換期にあったからである。では、それは何から何へと転換してゆくための過渡期だというのであろうか。1776 年のアメリカ合衆国の独立につづき、1789 年からのフランス革命ということを考えてみれば、なにか新しい力が、ヨーロッパという舞台の上で、旧体制を打破して、これにかわる近代的な市民社会を形成しようとしていたことは容易に理解できる。大陸の西端にある島国だからといって、この大きな動揺にまきこまれないで済ますということは、イギリス国民にも許されてはいなかったのだ。

ただここで問題になることは、ことイギリスに関する限り、市民社会の近代化ということが、よしそれが完全とはいえないのにしても、すでに早くから実現されつつあったという事実である。もしそういった現実がなければ、文学的にいっても、十八世紀にみられたイギリス小説のみごとな展開などはおそらく考えることもできなかったであろう。Whig, Tory 両党

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

による議会政治は ジャーナリズム文学の発生と その展開を刺激してきた。通商貿易の流行は十八世紀前半の「黄金時代」(the Golden Age) をともかく現実のものとしていたが、その「黄金時代」はあくまで地方の地主階級のものであったし、さらに十八世紀も後半に入ると、産業革命 (the Industrial Revolution) というやっかいな、しかもきわめて困難な問題と取組まなければならなかったのが、イギリス社会の実状であった。したがって 1750 年頃から 1830 年、あるいは 50 年までに、イギリスの産業化運動 (industrialism) がまきおこす社会変化は一般の市民社会に大きな影をおとし、全般の日常生活に重大な意味での結び付きを実感させるものとなっていた。

こういった社会情勢の上へおおいかぶさるように、フランス革命 (the French Revolution) という政治的、直接的、行動的な変革現象が迫ってきたのである。では、それをイギリス社会はどう受け取ったであろうか。確実なことは、まさに暮れ逝こうとする十八世紀の末年でありながら、いわゆる 世紀末的な情趣というものは ほとんど みられない ということであり、むしろ十九世紀に入った前後には、イギリス各地において革命的暴動の萌しすらみられたのである。それをいいかえれば、従来の社会秩序の破壊と再建ということを計画する 直接行動へのさかんな 盛り上りがみられ、そこでこの社会秩序を固守するか、あるいは破壊するか、その一点をめぐって、保守勢力と革新勢力との間に、はげしい闘争がくり展げられるのであった。しかも政治的、経済的には、たとえばフランスと違って、すでに近代化の途についていたイギリスにおいては、この社会秩序が問題になることによって大きくクローズ・アップされるのが日常生活の倫理面であったとしてもあえて不思議ではあるまい。

この問題はそれだけにとどまらなかった。問題が日常倫理面につながることは、それだけに社会市民をひろく巻き込む吸引力をもったし、文学者自体がまさに巻き込まれてゆくべき可能性をもち、その結果としても文学

が政治に接近してゆく場合の予想はますます大きくなるであろう。

たとえばブレイク (William Blake, 1757–1827) は 1780 年 6 月 6 日にニューゲイト牢獄 (Newgate prison) に焼打ちをかけた群衆の先頭にたった一人であったし、その場にはクラブ (George Crabbe, 1754–1832) も来合せていた。[1] またブレイクの作品集 *Poetical Sketches* (『習作詩集』 1783) から *Prophetic Books* (『予言詩篇』) とよばれる後期の作品群にいたるまで、時代にたいする政治的自覚は一貫してみられる。ワーズワス (William Wordsworth 1770–1850) がフランス革命に共感して、その渦中にまきこまれることのあったことは常識になっているが、それにもまして、*Lyrical Ballads* (『抒情小曲集』 1798) にあつめられた詩篇、たとえば 'The Female Vagrant' (「放浪する女」) や 'Simon Lee' (「サイモン・リー」) をみれば、それがいわゆる ballad と呼ばれる詩が常識的にもつ条件からはなれて、この社会的転換に適応することのできなかった落伍者の上に、作者の目があたたかい同情の光をあてていることに気が付くだろう。

William Godwin

また、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772–1834) とサウジー (Robert Southey, 1774–1843) を中心にして計画された Pantisocracy (権利平等主義) だが、これを青年達の理想がえがきだした一場の夢とみることも不可能ではなかろう。表面的にみれば、十八世紀末の感傷的なユートピア精神の産物であり、そこにゴドウィン (William Godwin, 1756–1836) が 1793 年に発表した *An Enquiry concerning Political Justice* (『政治的正義に関する考察』) の生(なま)の影響もみられるだろう。しかし、また一方では、この Pantisocracy の運動をユートピア精神の典型的な夢とみることに警告をはなちながら、「逆な見方をすれば、そ

1. Cf. J. Bronowski: *William Blake*, Pelican Books, p. 57.

れは恐ろしい体験という基底から発生している。その背後には、イギリスの現状に失望し、恥辱を感じ、純粋に苦悶する精神が存在する。道徳観と愛国的感情に、はさみうちになったディレンマがみられる」(...negatively it grew from a depth of terrible experience. Behind it lay a genuine agony of disappointment and shame at the contemporary condition of England; a dilemma of morals and of patriotic emotion.) といって、運動の意味を強調するハウス (Humphry House) の考え方もある。[1] このハウスの警告が注目すべきものだと思うのは、ワーズワスの場合と同じように、コールリッジの初期の詩篇のなかには、明らかに政治的発想によるものが多いからである。'Religious Musings'(「宗教的瞑想」1794)、'Destiny of Nations'(「諸国の運命」1796)、'France: an Ode'(「フランスを歌う」1798) などは一部の例にすぎないのだが、さらに重要なことは、これらが当時ひろく、群小詩人たちによって創られた政治的発想による作品を代表するという事実があったことである。

さらに興味ある実例をしめしたものはサウジーである。「湖畔詩人」(Lake Poets, or Lakers) とよばれるワーズワスやコールリッジの仲間としては最も保守的な詩人と考えられているが、青年時代のサウジーは完全に過激派ともいえる急進的革新思想をもっていた。1793 年に出版されたばかりの *Political Justice* を読んで大いに感激したが、翌 94 年にコールリッジとはじめて会って話した結果が Pantisocracy の運動へと発展していったのは、このゴドウィンの感化によることは明白である。その著書をよみながらうけた感激をサウジーは、「真実にして偽りなき民主主義は道徳の別名という他はない——この二つは人間でいえば魂と肉体の関係である」(...real true democracy is but another word for morality—they are like body and soul.) と手紙で告白している。[2] しかもこの告白を裏書

1. Humphry House: *Coleridge*, The Clark Lecture 1951-52, pp. 60-61.
2. Geoffrey Carnall: *Robert Southey and his Age:* The Development of a Conservative Mind, p. 26.

きするように、詩劇 *Wat Tyler* (『ウォット・タイラー』1794 年作にして、出版は 1817 年——この時すでに保守的になっていたので、出版は奇妙な印象を世人にあたえた)、叙事詩 *Joan of Arc* (『ジャン・ダーク』1793 年にかかれ、出版は 1795 年) などを発表した。もっとも *Joan of Arc* の再版が 1798 年に出版された時には、過激な詩行は書きあらためられ、史実を詳しくのべる注が分量をまして、次第に史的興味を中心とした作品へと改訂されたところをみても、サウジーの保守転向は比較的に早期のものであったことは明らかだ。しかし決定的な時期は、翌 99 年が終って、フランスの政変によるナポレオンの政権掌握が確立した時までは訪れなかった。

Robert Southey
(22 歳のとき)

さて、詩人の思想傾向を中心にしながら、政治と文学の接近した関係をみてきたのであるが、イギリスの歴史においても珍らしいと歴史家をしていわせるほどに大きな転換期であってみれば、それも当然のことであったろう。しかし、さらに文学的立場から純粋に考えるならば、まだいくつかの特色をあげねばならない。

その一つとして、政治と文学が接近したというなら、たとえば詩がプロパガンダとなることも考えられる。詩的プロパガンダ、プロパガンダ的詩、いやいずれにしても、そういった表現で、以上のべてきたような詩人の作品を規定することが考えられるだろうか。ひと度こういった反省をしてみるなら、おそらくその答えは、否という他はない。それは確実だろう。しかし、考え方によっては、プロパガンダという意識はないにしても、それに平行する行動は無意識にもなされていたように思う。すなわち宣伝とまではゆかなくとも、いわゆる伝達の方式については明白な考慮がなされていた。いま一例をあげるとすれば、*Lyrical Ballads* 初版の前書きで、ワーズワスが作品の多くは「社会の中流とそれ以下の人々が日常会話につ

かっている言葉が、詩の面白味をつたえるために、どれだけ適当であるかということを確かめようとして書かれた」(They were written chiefly with a view to ascertain how far the language of conversation in the middle and lower classes of society is adapted to the purpose of poetic pleasure.) という時、この伝達という問題はあきらかに考慮の対象になっているのではなかろうか。また、この詩集に協力したコールリッジが 'The Nightingale, a Conversational Poem' (「ナイティンゲール、会話風な詩」1798) を寄せたこと、くどくいえば、この詩を「会話風な詩」だと説明したそのことは、ワーズワスとの話し合いの結果であったろうか。ともあれ、この点からしてコールリッジに伝達のための、それも一般市民を対象とする伝達という意味での考慮があったと考える批評がある。[1]

すくなくとも詩に限っていえば、十九世紀に移ろうとする頃、新しい詩の言葉がつかわれはじめたという説が正しいなら、上記の事実はそれに相当する——いや、そこで考えられることは、二十世紀のイギリス詩が革新の旗印にかかげたものの一つに「会話風な調子」(the conversational tone) を基にして現実感を強調することがあった。これとそれとが全く同一現象だと割り切ってしまうことはできないが、ただ共通していえることは、詩が現実に接近しようとする態勢をしめしたということである。二十世紀のいわゆる新しい詩がエリオット (T. S. Eliot) などの努力によって求めた現実が世界大戦によって荒廃したヨーロッパの実体であり、そこに生活するうつろな人々に呼びかけようとしたと考えてよいなら、十九世紀当初の新しい詩は、フランス革命によって刺激されて燃えあがった近代的市民社会の実現を目の前にひかえた状況のなかにあって、理想の達成を夢見る一般市民の意識に呼びかけたのである。いずれの場合にも、詩は現実に接近していったのであるが、その現実が、二十世紀においては、下降する社会

1. Cf. Humphry House: *Coleridge*, pp. 70–73.

であったのに対して、十九世紀においては、まさに上昇しようとする社会であった。

だからこそ、といってよいと思うのだが、同じように会話風な表現の力によって現実に接近しようとした作者の意識は共通するにもかかわらず、二十世紀の新しい詩は十九世紀の新しい詩をロマンティックだといって、それだけで拒否しようとする。いわば下降する文学の次元は、上昇する文学と次元を異にするが故に、それだけでもうどうすることもできない違和感を感じるものなのだろうか。あれは青年の(それは青二才のという意味もこめて)文学だといって、このロマン主義文学に白い眼をむける二十世紀の詩人には、次元的相違というものを直観する早老者のヒガミにも似たものはないであろうか。

ii. 文学と倫理

しかし、いままで述べてきたロマン主義文学において、政治に結びついたのが、多くの場合、青年であったことは間違いない事実である。しかもこれらの青年は、まもなくはげしい革新性(それは「過激な民主主義(ジャコビニズム)」(Jacobinism) と呼ばれ、この運動に参加する者を「ジャコビン」と呼ぶ時、いささか軽蔑の意味があった)を喪失したかのように、いずれも保守的な傾向をしめしたことも事実である。いわばここにもいわゆる転向現象はみられるのであるが、この現象自体はそれだけとしても、この現象をどう理解するかということはこの時代の文学を理解する上での一つの態度を決定するのではあるまいか。

たとえば、ここにみられる転向現象を表面的にみるなら、それはなにも珍らしい事例ではない。身近なことからいえば、二十世紀のイギリス詩壇をとってみても、1930 年代にオーデン (W. H. Auden) の一派が共産主義に共鳴して左翼的な文学傾向をしめしながら、その 30 年代の末には、もう転向の姿勢をしめした——しかも、第二次大戦の開始がその転向を決

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

定的にしたことを思えば、[1] これら二十世紀詩人の行動そのものが十九世紀初頭の詩人たちの態度なり、在り様をそっくり例証してくれるとも考えられる。しかし、それは表面だけの類似にとどまることにも注意しなければなるまい。

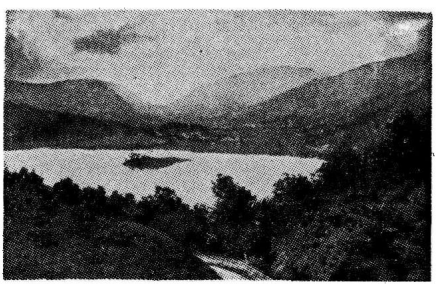
たしかにワーズワスも、コールリッジも、サウジーも変った。フランス革命の進行がこれらの青年の理想を裏切ったからだといわれる。「自由と平等と博愛」(Liberty, Equality and Fraternity) というモットーはナポレオンの出現によって影もなく見失われ、ウォータルーの勝利 (1815) にいたる永い戦いが続いてゆく時代であった。こういった時代のなかで、詩人の転向はなされたのであるが、そこには次のような事実があったことも考慮してよい。

ワーズワス兄妹は 1799 年にドイツから帰ったが、それ以前から「北国」('North of England') に住みたいという希望はもっていた。これを知ったコールリッジは、ワーズワスが「北国」に帰住することによって文字通りの「隠棲者」('recluse') になることを心配していた。しかも、次のような言葉で激励することを忘れなかった——「ブランク・ヴァースで詩をかいてもらいたい。フランス革命が完全に期待を裏切った結果、人間の向上進歩にかけた希望を放棄し、享楽的な個人趣味といってよい状態にまで堕ちながら、それを家庭的情愛だ、空虚な哲人にたいする軽蔑だといった美名のもとにごまかそうとする人間がいる。そういった人間に呼びかけてもらいたい。」(I wish you would write a poem, in blank verse, addressed to those, who, in consequence of the complete failure of the French Revolution, have thrown up all hopes of the amelioration of mankind, and are sinking into an almost epicurean selfishness, disguising the same under the soft titles of domestic attachment and contempt for visionary *philosophes*.) これはワーズワスが意図していた「人間と自然と社

1. Cf. 本講座第十二巻「二十世紀 III: 1941 年以後の英詩」、pp. 3-6.

会」についての大瞑想詩 *The Recluse* (『隠者』)——実際にはその一部である *The Prelude* (『序曲』1850) の第一、二巻を書いていたのだが——にたいする期待をしめす言葉でもあったのだが、こういった手紙を書くことができたコールリッジはまだ革新性を失なっていなかった。それだからこそ、ともすれば友人ワーズワスが後退しようとすることを心配したのである。なぜなら「家庭的情愛」とか「空虚な哲人にたいする軽蔑」という時、コールリッジが思いうかべていたのは、完全に転向してしまったサウジーの姿であったろうという。[1]

この説は正しいと思う。なぜなら、コールリッジと Pantisocracy の運動を計画して間もなく、1795 年 11 月には、サウジーは叔父と共にポルトガルでひと冬を過すために出発したのだが、その時のサウジーは「政治熱からさめて、サスケハナ (Susquehanna) の川辺よりもさらに手近なところで、家庭の平和という聖地をさがそうと決意し」(He had renounced political enthusiasm, and was determined to look for the holy ground of domestic peace in some place nearer than the banks of the Susquehanna River.) フリカー (Edith Fricker) とひそかに結婚していたのである。[2] いわば、政治的発想により社会の革新を求めるよりも、家庭という小世界への転向、それは 'Fraternity' が 'domestic attachment' へと移ることを暗示しているだろう。コールリッジがワーズワスに恐れたのはこの変化現象の実体であった。しかし、それはコールリッジの取越苦労ではなかったのではあるまいか。


Grasmere

1801 年 1 月、*Lyrical Ballads*

1. Mary Moorman: *William Wordsworth*, The Early Years 1770-1803, p. 443.
2. G. Carnall: *Robert Southey and his Age*, p. 37.

の再版が二巻本として出版された時、ワーズワスはグラスミアー (Grasmere) の「ダヴ・コテッジ」(Dove Cottage) に引き移ってから書いた数篇の詩を追加印刷したが、そのなかに 'The Brothers' (「兄弟」) と 'Michael' (「マイケル」) の二篇がある——共に 1800 年の作。すくなくともこの二篇の詩は、初版の作品にみられるような幻想的な要素を全くもたない点において、いちじるしい特色、いわば正常性をしめすものとして対照的である。しかも、作者はこの二篇の詩に特別に関心をもっていた。というのは、再版の詩集ができるや、直ちにその一組をワーズワスは政治家フォックス (Charles James Fox, 1749-1806) に、手紙をつけて、送った。保守派のピット (William Pitt, the younger, 1759-1806) に対抗する革新派の政治家としてフォックスはワーズワスの尊敬する人物であったことを思うと、この詩集献呈も不自然ではなかろう。しかし 1 月 14 日付けのその手紙をみると、この献本の真意は 'The Brothers' と 'Michael' の二篇を読んでもらいたいことだとはっきり書いて、さらに次のようにつづける、「思うに、最近わが国で実施されて参りました諸政策のもたらした諸結果のなか最も不幸なものは、社会の下層階級の人々の間における家庭的愛情の急激な衰退であります」(It appears to me that the most calamitous effect, which has followed the measures which have lately been pursued in this country, is a rapid decay of the domestic affection among the lower orders of society.)。[1] ワーズワスがいいたかったのは、この家庭的愛情が一般市民の生活を健全なものにする根本条件であること、これが産業主義の発展の余波によって破壊されかけていること、したがって上記二篇の詩によって家庭的愛情の必要を強調し、こういった害悪を阻止しようとしたこと、これらのことをフォックスに訴えたいという気持であった。一般市民にたいする同情と共感は若き日のワー

1. Philip Wayne (ed.): *Letters of W. Wordsworth*, The World's Classics, p. 38. なおこの手紙については、Mary Moorman: *William Wordsworth*, pp. 502-5 を参照。

ズワスと変ってはいない、むしろそれはこの詩人の体内に同化されていることは認めねばなるまい。しかし、また同時に、その詩人の目が「家庭的愛情」といい、家庭を支配する道徳といい、ともかく革命的情熱が考えた人間存在というマクロコズムから、家庭というミクロコズムへと、作者の倫理的な目が移っていることだけは明瞭に例証されている。これは先に述べたコールリッジの心配がたんなる取越苦労でなかったことを証明したことになる。これがワーズワスの転向を暗示する一例といえないだろうか。

そこで、こういったコールリッジ自身はどうだったろうか。ワーズワスの後をおってネザー・ストウェイ (Nether Stowey) の家に移ったコールリッジも、1804 年 4 月には、健康上の理由からマルタ島 (Malta) に渡ることになった。間もなくマルタ総督ボール (Sir Alexander Ball) の秘書官となって、政治の実際を体験し、はるかに祖国を望む彼の目には愛国者の光がひらめくこともあった。それは過ぎし日に自分を支配していた反逆精神を反省することになる。この反省がどんなものであったか、それが明白になるのは、1806 年 8 月に帰英してから 3 年後にはじめた週刊哲学誌ともいうべき *The Friend* (『仲間』1809 年 8 月から、翌年 3 月までの間に 28 号を出して中絶) を舞台にして発表した時局評論であろう。たとえば、そのうちの一つである 'On the Principles of Political Knowledge' (「政治的知識の原理について」第七号以下において掲載) をみると、そこにはルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712-78) の政治思想——その主著 *Social Contract* (『社会契約』1762) にみられるものだが——を批判しながら、同時に 1790 年代においてコールリッジ自身が公表した意見——ブリストル在住時代に発行した *The Watchman* (『見張人』1796 年 2 月から 5 月までの間に 5 号までだして中絶) にのせた政治的評論、その他の公開講演——を、それが政治熱にうかれすぎて犯した誤謬をふくむことを認めながら、訂正しようとする。個人道徳の世界を支配する Reason (理性、良

心の命令)と、人間集団である社会を治める Understanding (経験的知性)の区別を確立することによって、ルソーおよびその一派を批判したのである。このように個人道徳の世界を社会から区別することによって、コールリッジの関心は前者の価値を確認しようとした。また、そういった自分を規定して、いわゆる Jacobin ではなく、Patriot といおうとする、なぜなら、貧しき人々のためにその物質的、精神的生活を改善しようと努力する者こそ「愛国者」だと考えたからである。また税制を論じた評論においてはペイン (Thomas Paine, 1737-1809) の主著—*Rights of Man* (『人権』1791, '92)—にすら批判の鋒先をむけずにはいられなかった。

このようにして、コールリッジの転向はすすめられていた。1809 年、ワーズワスは早くも、コールリッジがいわゆる改革に反対であることを認めた。これはまた社会全般の空気に見られるものであったようだ。たとえば革新派ジャーナリストにおこった筆禍事件が、1801-1807 年の間においては年間平均 2 件をこえることはなかったのに、1808-10 年の間では職権上の通報は 42 件、裁判になったもの 18 件を数えるにいたったのである。[1]

以上のように詩人たちの転向は明白だということができるであろう。ではその文学は、その後において、どう展開するのであろうか。いや、それが十九世紀にはいって四半世紀の文学を本質的に決定するものであったのではないだろうか。

そこで、世紀の変り目において、青年期から壮年期へと、脱皮するが如くにして、展開していった以上の作家をみると、なにか共通した現象がみられるのではあるまいか、しかもそれぞれの個別的な政治的情熱のなかにそれがみられるのではあるまいか。たとえば、青年サウジーがその政治的情熱をかたった時に、「真実にして 偽りなき民主主義は 道徳の別名という

1. John Colmer: *Coleridge: Critic of Society*, p. 91. なおコールリッジのジャーナリストとしての行動については本書による点が多い。

他はない——この二つは人間でいえば魂と肉体との関係である」と断言したことはさきにも述べた (4 頁参照)。Democracy と morality をこういった関係において捉らえることが不可能でないことは理解できるにしても、はたして現代の目でみたとき、そういった強調のしかたが成立するだろうか。それだけではなく、コールリッジもまた、いわゆる「ブリストル講演」(The Bristol lectures) とよばれている連続公開講演 (フランス革命に刺激されたイギリスが、いかにして国内の改革を推進するかという主題が中心であった) において、その第一回——1795 年 1 月になされた——の演題を 'A Moral and Political Lecture' (「道徳と政治に関した講話」) とした。いや、これら一連の講演について、「彼の主張、すなわち社会の改善は本質的には道徳をどうするかという問題で、政治的な問題ではないし、そこで必要な道徳の改革は、宗教のたすけを借りなければならないとする考え方は、後期の政治評論のなかで表明された見解と全く一致するものである」といわれる。[1] また *The Friend* が 1809 年にでた折にも、「文学、道徳、政治の週刊誌、政治家・政党の意見および時局的記事は除外」(A Literary, Moral, and Political Weekly Paper, Excluding Personal and Party Politics and the Events of the Day) という但し書きがつけられている。これらの事実からしても、コールリッジが政治的発想にたって行動した時には、つねにそれが社会道徳と関連して考慮されていたことを予想することはできるだろう。

そこで、最後にのべなければならないのがワーズワスであるが、*The Prelude* が直接この詩人の体験をかたっているのであるし、フランス革命を中心にしてイギリスの一人の詩人が体験した精神史ということもできる面があることを思えば、敢えて贅言をついやすまでもないのである。たしかに 1802-13 年の間、対フランス戦争についてのワーズワスの態度は Tory

1. J. Colmer: *Coleridge: Critic of Society*, p. 23.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com